いつからか

サンバシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつからか

【Ｎコード】
Ｎ３２０１Ｔ

【作者名】
サンバシ

【あらすじ】
「なにがしたいんだ、あんた」

いつからなのか、覚えはない。埋まらない、空間。
その覚えのない感覚を追って生きる少年は、それを手に入れるのか。
それともすべてを失うのか。

プロローグ

いつからなのか、覚えはない。

産まれた場所も、産まれた日も、知らない。

誰に付けられたのかも分からない名で、少年はただ、ゼイ、と呼ばれていた。

身体中についたよごれも気にならず、ただ生きるために目の前にある物を、目の前にない物を奪って食べた。

周り中がそうだった。そうして、生きて、死んでいった。

紛争という名の何かがあったからだと、周りの人間は言った。その名の意味する所も知らず、ただこの現状で生きる。

過去も、先も、気にせずに。

そんな過去が、今から十年以上前にあった。

一　少年と闇色

その日の事をゼイはよく覚えていた。

いつものように身体の小さなゼイや一緒にいた子どもたちは塵芥（ちりあくた）のように扱われ、身体の大きな大人と呼ばれる人間たちに振り回されていた。いつもと違っていたのは、突然大人たちに捕まえられ鉄の檻に入れられたこと。そしてゼイだけは別の鉄の柵に囲まれた所に押し込まれた。

それでもいつものように、ゼイは逃げる算段をつけていた。重い楔を、両手と両足に付けられるまでは。

「ガキ。お前がいつも邪魔しやがって……これで逃げらんねえよ」

ゼイたちと同じく薄汚れた顔の大人に、せせら笑う声と共に蹴りあげられる。悲鳴を上げるほど初めての経験ではなかった。ゼイはただいつものように奥歯を噛み締め、逆流しそうな何かを堪え、転がった地面から扉で切り取られた青いと呼ばれる空と薄汚れた存在を睨んだ。

「仲間と一緒にしてまた逃げられちゃ困るからな」

「明日までそこの姉ちゃんと一緒に楽しみな」

ゼイにとって仲間と呼べる人間はいない。ただ近くにいてゼイが動く時に都合が良いか悪いか、ただそれだけだった。そしてそれは他の子どもたちも同じで、互いに幾度も裏切りあってきた。

大人たちの薄ら笑いする口元が見えた後、扉が閉じる重い音がし、地べたに転がっているゼイも鉄の柵も、闇が覆った。

真っ暗になったどこかの石畳の冷たさがゼイの身体にあった少し

の熱を奪っていく。しばらくその感覚に身をゆだねていると、闇の中から女の声が聞こえてきた。

「……痛かった、よね」

そういえば誰かと一緒だともう忘れかけた声が音だけになってゼイの思考を刺激する。

ゼイはいらいらした。こんな風に襤褸(ぼろ)切れのように扱われることにではなく。

独りでいられないことに、だった。

ゼイにとって次にどこへ連れて行かれようと、どんな扱いを受けようと、それはそれ以上でもそれ以下でもない。何かに追い立てられるように、日々、自分を生かしていくだけだった。

後頭部が痒い。ゼイは手を上げようとして、いつもとは違う重さと拘束にかっとなって奥歯をギリと唸らせ両腕を闇に向かって振り上げる。鉄格子に当たる楔の耳障りな音と自ら打ち付けた両腕の痛みと動かせない両足に、きつく閉じた目の前が赤くなった。

暗闇の中、高い天井に開けられた穴から空の光が入り込んでくるおかげで徐々に闇に目が慣れていく。同時に痒みも忘れ、ゆっくりと呼吸をする。ゼイは冷たく湿っている石の上に両腕を楔ごと伸ばして空いている空間に寝転がった。濡れていないだけ、今日はましだった。

楔の硬さと高さが枕にするにはちょうど良い。頭の下に引いて、また目を閉じる。

「これ、」

ゼイは急に近づいてきた声と気配に飛び起きようとした。でも反応が鈍い。楔の重さに引きずられて横に転がり、壁に肘がぶつかる。

「……なんだよ、くるな」
「だって、さっき口元に血が、」

女が近寄ってくる気配がしてゼイは自由にならない身体を気配とは逆の方向に動かした。
血が出ているからなんだっていうんだ。いつものこと、知らないうちに他のよごれといっしょになって、また雨か何かとまじって消えていくものを気にしてなんになる。
薄暗がりの中、灰色の人間は両手が自由なのか何かをもって再び手を伸ばしてくるのがゼイの視界にぼんやりと見えた。
ゼイがその動きを睨んでも女の手は怯むことなく口元に近づいてきた。触れる瞬間、布と思(おぼ)しきものごと、噛みついた。

「いっ！」

女が出した悲鳴のような声に構わずゼイは力任せに噛みしめた。二度と向かって来ないように。
引こうとする指を、焦ったような気配を追いかける。そうして更に顎に力を入れると布と歯が摩擦のせいかギリギリと音をたてた。すると力の入ったその細い首に冷たい何かが当てられる。
何のぶきなのかなんて見えない、知らない。でもここでやられるくらいなら、かみきってやる。
そう思ってゼイが噛み続けているとその冷たい何かがぐいと首元を引っ張った。ゼイはその力に抵抗できず手を噛んだまま両手の楔と一緒に目の前の人間にぶつかった。それでも抵抗する為に目の前の身体のどこかを空いている指だけで掴みひたすら掻きむしる。蹴飛ばしたくても足は自由ではなく、そして上半身を持ち上げられ支える場所のない状態では何もできなかった。より抵抗の力を強める。
いったいこの女はなにがしたいんだろう、とゼイは思った。冷たいと思ったそれは、女の指のようだと気付く。首を締める訳でもな

くただ首の後ろを抑えつけ、女は自分の身体にゼイを引き寄せ続けた。
息を詰めたような音が何度かしても、最初に聞いた悲鳴以外の声は聞こえなかった。小さくてもゼイの力が勝つか、女の我慢が勝つか。
少しして、結局、ゼイが飽きた。
いつかどこかでいつの間にか死んでいった人間たちのように、ゼイが生きることも終わる。ゼイにとってはそれが今日というだけのことだった。
ゼイは噛みついていたそれを放す。涎や何かでべとべとになった布と指が糸を引いていくのが薄暗がりの中見えた。
くちがいてえ。
ゼイが少しの嘔吐感に咳き込み肩の力を抜くと身体がずるりと地面に落ちていった。でも完全に湿ったそこに落ちる前に首の後ろに回されていた指がゼイを支え再び女の身体に引き戻される。
ゼイの指先も掴んでいた何かを放し、そのままだらりと冷たい地面に落ちて触れるかと思ったが、少しだけ温かなどこかに落ちた。座りこんだ状態でゼイを抱きしめている体勢からすると女の足の上だろう。

「……なにがしたいんだ、あんた」

じっとしていても女はそのままの状態で、ゼイを抱きしめ続けた。よくある子どもを亡くして悲しむとかいう女なのだろうか。町にいた大人の女が時々泣きそうな目をゼイたちに向けてきたことがある。それでもそんな目は一瞬で、また何も見ていない疲れた目で日々を送っていた。
そんな目を向けられた事はあっても、ゼイにこれほど誰かが近づいたことは一度だって無かった。寒くても濡れていても独りで越え、その辺にある襤褸切れと共に夜を過ごした。

初めてじわりと伝わってくるものは、女の体温だった。
返事のない女にそれ以上問うのも面倒くさく動くのも煩わしくそのまま力を抜き続けていると、ゼイの耳に自分以外に脈打つ、生きている音が聞こえてきた。
身体を包む温度を感じ、その音を聞きながら……ゼイはいつの間にか深く眠った。

数時間後なのか、翌朝なのか、知らない。
何かが動く気配にゼイは目が覚めた。ぼんやりと冷たい床の上に横たわっていると、扉が開いて眩しい光が入ってきた。その光に慣れず、目を眇めた。
そのまま扉を見続けていると、先程まで自分を抱えていた女と思しき人間が男たちに引き摺られるようにして連れて行かれる所だった。この鉄の柵を越えていった動きに気付かないほど深く眠っていたのかと、寝転がりながらぼんやりと考えた。

「ゼイ」

誰かが付けた名前で呼ばれる。逆光の中から聞こえてきたその女の声を最後に、扉は閉じた。
再びゼイを覆った暗闇の中、名乗っただろうかと記憶をたどったけれど、掠りもしない。聞き間違いかとまた痒い後頭部に手を伸ばす。しばらくカシカシと掻いて、手の軽さにふと気付く。
楔が解かれていた。片手に辛うじてぶら下がっているそれは余計重く感じた。起き上がってゴトリと片手からも楔を落とし、足も動かすと呆気ないほど拘束は緩んだ。
肩や手首を解すように回し、立ち上がる。先程から感じていた膝の辺りにある違和感に裾をめくってみると、何かが幾つか結び付けられていた。そのうちの役に立ちそうな留め具を手にとって、呟く。

「……なにがしたかったんだ、あの女」

ピッと小さく口笛を鳴らすと、しばらくして天井から返ってきた小さな口笛二回。打ち合わせ通り暗く湿ったそこから這い出し、またゼイは外に出て自由に駆け出した。

そこに入る前には知らなかった、心音と温度と共に。

二　少年と暗褐色

あれから鉄の柵から逃げだした子どもたちと話し合うでもなく急に荒れ始めた町を共に離れた。いつからいたのか分からない町だった。そうして余所の町に移動する途中、暗い闇の中数人で固まって寝起きをした。

そんな子どもたちの近さに慣れないゼイは独り少し離れた所で火の番をしながら短く眠った。

起きている時は静かな暗闇の中で、あれは何だったのかと考えていた。あの子どもたちに近づいて一緒に寝たら、あの温度がもう一度感じられるのだろうかと思ったこともあった。

そうして辿り着いたのは、場所自体は紛争に巻き込まれなかった、山奥の名も知らぬ町。

突然現れ畑の野菜や家の裏手から食べ物をくすね始めた子どもたちの状態を見かねた大人たちは、威嚇し続けた子どもたちを何とか手懐け、まず身体を洗うことを教え、自分たちの使い古しの服を一枚着させた。

そうして少し身綺麗になって現れた子どもたちの実際の年齢は誰にも分からなかった。周りの人間から恐らく、と年齢を定められ、ゼイは背丈の高さのせいか十二、三は過ぎているだろうと言われた。

身綺麗になったゼイは、他の子どもたちより幾分ましな風貌だったようだ。

薄汚れた身体から現れた他の子どもたちと同じ茶色の髪と焦げ茶の目、何度か擦って垢が落とされた少し暗めの肌色。それでも上手い具合に目鼻立ちが整っていると、それだけで人目を引いた。

大人たちから今までにない視線を送られ、その視線の気持ち悪さにゼイは幾度かわざと泥まみれになって過ごした。それでも自分の外見がその日生きることに使えると気付くまでに時間はかからなかった。

そうしてあの日の心音と温度は、違う形で復元される。
戦いにより男たちが出払ったその町で、ある意味飢えた女たち。触れられることに慣れていないゼイをあっという間に慣らし、心音と温度が素肌から伝わるほど近づいてきた。教え込まれていく初めての感覚に怯え、そして慣れていった。
けれど女たちの体温を間近で知ってもそこで深く眠る事は無く、ゼイには浅い眠りしか訪れなかった。
あの時じわりと伝わってきた感覚。
首元に当てられた女の指。
背中に回った細い腕。
何かを宥めるような心音。
復元しようと幾度となく試しても、あの時とどこか異なるそれらからは何も満たされることはなかった。
試すことに飽きてきた時、その町の年長の年寄りたちは、次代を担う人間を育てる為だったのか自分たちの世話をさせる為だったのかは分からないが、生きるための術をゼイや他の子どもに教え込んだ。
土地を耕し、食物を育て、文字を読み書くこと、売り買い。奪わずに生きることは意外と難しく、面白いとゼイは思った。
そうして幾年かその町で知識を得、知恵をつけ、その山間（やまあい）の町に飽きた頃、他の町々へと移動し続けた。
それを繰り返すうちにゼイはさらに背が伸び、筋肉が付き、声色が変わり、嫌っていた大人と呼ばれる姿形になっていった。
そんなゼイの成長と共に、闘いで疲れた町々も新たな支配者たちの波を受けつつ回復と衰退を繰り返す。荒れた状態が続く町もあり、廃れた町もあった。
幾つもの町を渡り歩き、色々なものを見聞きしては時々振り返る、自分の過去の持ち物。
町に定住しないゼイにとって物はそれほど重要ではなかった。
それでも持ち運び続けた、あの日膝に結び付けられた留め具、一

緒に括りつけられていた緑色の組み紐と日に当てると光る石。それらは盗まれないよう手持ちの布で包み、腰に巻いた布に縫い付け、誰にも見せたことは無かった。でもそれに似た物を町々で見ることも無かった。

あの女は何だったのか。

ただ生きる日々を過ごしていたゼイは、二十を過ぎた頃からよく考えるようになった。

復元できない感覚、見知らぬ物、見知らぬ女に知られていた自分の名。

「――ナークスに行く」

「……まじ？　あそこにまた戻んのか」

覚えがない時から生きていた町に行くと告げた時、同じくそこから逃げてきたワジが目を丸くして答えた。

「紛争の中心地だった場所だぞ？　いくら十年経ったってまだまだ荒れてるって聞くし、オレは行かねえからな」

「誘ってない」

「相変わらずかわいくねーの」

ほんとひねくれちゃって、とぼやくワジの声をゼイは背中で払い、少ない荷物をまとめる。

町々が回復するにつれて女たちは着飾る余裕が出来、装飾についての情報に耳聡くなった。組み紐を編む昔ながらの用法がナークスに隣接した町にあるという話をゼイが聞いたのはつい最近の事だ。

まだ荒れているというナークス。あの女がいた町。そこに戻り、何がしたいのか。

ゼイは自分でもよく分からなかった。でもいつまでも自分の内側を苛(さいな)む埋まらない何かを探しに、少しだけ留まっていた町を離れた。

＊　＊　＊

「意外とあちーな、ナークスって。それに場所の記憶がまったくねえ」

覚えてないもんだなー、と間延びした声が横からする。結局旅立つゼイにぐずぐず言いながらワジは勝手について来た。そうしていつもと変わらずぐずぐずと話す。

そんな五月蠅い男の声をゼイは無視し、町の入口に立つ。

ナークスを取り囲んでいた城壁や門は焼け落とされていたが、関所のような小屋が新たに建てられており警備にしばらく足止めされる。そこであらかじめ用意しておいた身分証明の札を見せ、幾らかの金を渡し、数日の予定で町に入った。

「……何だよ母親の墓を見に来たって。母親捜しの旅にでも来たのか？　ゼイ」

「お前だって母親の顔は知らないだろ」

「まあどの墓見ても、親の墓ってか」

ぎゃはは、と腹を抱えてわざとらしく笑ったワジの顔。えくぼができるのは昔から変わらなかった。

ゼイにとって鬱陶しいと思える男だったが、ゼイが町を移動したいと考え始める頃決まってワジはゼイの近くで寝起きし、独りで町を離れて行ってしまうことのないようついて来た。そうして結局なんだかんだと一緒に色々なものを見て生きてきた。どこかの町の爺

さんに言われた「類を以て集まるだな、この悪ガキども」の“類”には同意したくない、とゼイは思う。
辛うじて機能している宿を確保しワジと別れ、町に入った理由を表面上整えるため一先ず墓場に足を向けた。
紛争の跡が色濃いナークスだったが、駐留している暫定軍の兵の為に商売は小さくとも成り立っていた。軒を連ねているその裏道を関所の警備に教えられたとおり歩き、町外れに出る。
そこは幾度となく争った事が分かる、荒涼とした場所。墓場と言っても土が盛られ、杭が刺さっている所と何も無い所が混じった土地。
もしかするとこの杭の下に葬られることのなかった人間の方が多いかもしれない。そうして数えきれないほどのその杭の数をゼイは眺める。
――俺は、生き延びた。
思ったのは、ただそれだけだった。

三　少年と灰色

墓場から裏道に戻り、以前いた町の女たちから聞いた組み紐を作っては売っているという老婆のいる場所を探した。

入り組んだそこは迷路の様で、それでも日の落ちる前に入り込んだ裏道で見つけた、染められた糸の数々。その糸は板の上に乗せられ、幾つかの小さな杭に引っ掛けられ、並べられていた。その板に囲まれるように地べたに座る、独りの小さな人間。頭を覆っている薄汚れた布地と白い髪から、老婆と分かる。

「――あんたがこれを編んでるのか」

「口のききかたもしらないような小僧は、かえるんだね」

背中を丸め顔を上げないまましゃがれた声でもごもごと言い、かかと笑う老婆に思わず舌打ちをする。

「……教えてほしい」

「見てのとおりさ」

かかと再び笑いながら言う老婆の皺だらけの手を見ても何も無い。

「小僧がなんだい、ほれたむすめっこにやるために、ここまでかいにきたか」

もごもごと言いながら、老婆は胡坐を組んだ足を無造作に指先で掻く。日は落ちかけ空は薄暗かったが、その手首に見えた薄汚れた幾つかの組み紐。

「……その組み紐には何の意味があるんだよ」

「うごかないものに、こたえる言葉はないだろ」

老婆の色に染まった指先が糸の乗った板を叩き、背中側の戸口を指す。これを運べと言葉にせず指示するその指にゼイは溜息をつき、その板を持ち上げ、裏道に並んだそれらを幾度か往復して古びた屋内に運んだ。

杖を持ってこい、灯りをつけろ、湯を沸かせ、という留(とど)まる事を知らない数々の言いつけを聞き、最後に「はよかえれ」と言われ、初めて手近にあった物に当たる。

ゼイにしては随分辛抱した方だった。どこかの町の爺さんたちと同じような扱いを受けたことを思い出し、どこの年寄りも同じだと不機嫌さを顔に出した。

老婆は大きな音をたてた木箱を見ることもなく「おお、こわ」と思ってもいない口調で呟く。

ぱちりと老婆の横に置かれた火鉢が鳴った。その火に、火鉢の近くに置かれた山と積まれている色とりどりの組み紐が照らされている。

どこからか持ってきた食べ物を飲み食いし出した老婆は、板敷きに片足を立て睨みつつ座るゼイを見ることなく言った。

「いみ、ときたか」

食べながら話す老婆のもごもごとした口調はさらに聞こえづらく、はっきり話せと言いたくなる口をとにかく閉じてゼイは続きを待つ。年寄りの話は、遅い。

「きえてなくなった町であまれていたこれの、なにが知りたい。ただの、女がつけるかざりさ」

「だから、意味。始まりは何」

苛立ちがゼイの口調を早くする。

「それを知って、どうしたい小僧」

「どうだっていいだろ。動いた分だけもらえるのは道理だ」

「この先みじかいとしよりは、知りたいことには欲がでる」

かかと笑う老婆は引かない。頼み事をする方が、力は弱い。上手く聞き出せなかった自分が腹立たしかった。けれど、一先ず知らなければ話す気にはなれない。

尋ね方を、変える。

「……この組み紐で身元は分かるのかよ」

「ほ。あたしは女が身をかざるためのもんだって言って売ってるものだ。だれに売られるともわからんもんに、身元なんてあみこめるかい」

「なら、いい」

ゼイは半眼を閉じて立ち上がった。話す気のない人間にこれ以上請うてまで知りたいわけではない。苛立って強引に動きだしそうな拳をきつく握って戸口へと戻る。

その意地の固まりとなった背中に老婆は笑っていた口元を少しだけ引き締め、しゃがれた声を投げた。

「わかいもんは、せっかちだね――――人さがし、かい」

ぱち、と火鉢から大きく爆ぜる音が鳴った。

老婆は目の前の少年から青年に入りかけた人間を長い前髪の奥から見つめる。組み紐の意味や編まれた文字などの読み方についてこれまで老婆は隠しているつもりはなく、ただ紛争後聞かれる機会が無かっただけだった。あっさり教えても良い話だったが老婆の性質

から素直にそうすることはない。
さて、どうしたものかと見えない前髪の下で老婆は目を閉じた。
「あたしらカチディは、いきのこったものが少ない」
消えた町、カチディの生き残りは語り出す。
町は一族そのものだった。それが消えた今、生き残った老婆にできることは、昔は娘だったら当たり前に編めていたものを編み、その組み紐の意味も知らぬ者たちに手渡していくことだけ。
「この緒(お)だって、みなといっしょにもえてきえたさ。昔の緒をもってるものは少ないだろ」
皺だらけの手が、古びた組み紐をなぞる。
闘いで疲れた人間たちからこの編みの意味を問われることはなかった。ただの飾り、そして商品として扱われてきた。それで良いとも残念とも思わない。ただ、編み続けていた。
そこへ尋ねてきたのが女ではなく、老婆からしたら男になる手前のひよっこの人間。その事実に、老婆は嗤った。
そんな老婆の表情は白髪と覆いに隠されてゼイには読めず、もごもごと話す声音に変化はないように聞こえた。再び「なにが知りたい？」とまた繰り返される問いに、次は答えが返ってくるだろうと思わされる何かがあった。そんな気がした。
ゼイは一瞬のためらいの後、腰元にあるそれを取りだし初めて人目に晒す。少し離れた火に照らされず、緑色の組み紐は灰色に見えた。
「……この人間は、生きているか知ってるか」
生死が知りたい訳じゃなかった。残されたこれに何の意味がある

のか、知りたいだけだった。でも、口を突いて出てきた言葉は、あの女の生存の有無。

顔を少し上げた老婆が小さく手をこちらに向け、指だけを動かし戻って来いと言いつける。

呆れなのかこれから分かることへの緊張からか分からない溜息をついて狭い屋内を数歩戻り、老婆の前に組み紐をかざす。

それが見えているのか分からないほど長い前髪をした老婆は、ほ、ほ、と相槌のような声を出し、ゼイの手にある組み紐には触れようとせず、自分の手首にある組み紐を触る。

「まためずらしいもんの緒だね。ひろったのかい小僧」

「……生きてるのか？」

それまでの、かかとした笑い声ではなく大きなしゃがれた声で笑い終えてなお丸めた背中を上下に揺らしながら、老婆は言った。

「は、は。会って、みるかい」

ゼイの内側の埋まらない何かが、その言葉に手を伸ばした。

四　少年と鳶色

翌朝、今日はついていくと言ってきかないワジを撒く。約束通りの時刻に老婆の古びた家を訪れたが、水汲みやら薪運びやらを言い付けられ、そうして言いなりになっている自分にゼイは呆れた。こんな姿はワジに見られたくない。

一通り老婆の朝の支度が済んだ所で近くに来いと杖で手招きされ、座れと言い付けられる。

溜息をつきながらその通りに動くと、のし、と老婆がゼイの背中に乗った。

「……おい」

「としよりをながく歩かせるつもりかい」

先程まで散々家中を歩きまわっていた老婆に言われたくないが、すでに杖を持った両手がゼイの顔の前に来ていた。ゼイは小さく舌打ちし軽い老婆を背中に乗せたまま立ち上がり、杖の先で示される方向へと進む。

裏道の裏道を歩いていくと老婆を見知った人間たちに冷やかしの目とからかいの言葉をゼイは投げられた。やっと鬱陶しい裏道から出、精神的に疲れきったゼイの目の前に広がったのは、ナークスの現在の暫定軍部が置かれている中心。その、砦。

「ほら、さっさとあるけ小僧」

あっちだよ、と指す老婆の杖の先は、紛れもなく軍司令部の砦。少し先にいる警護の人間たちに二人は既に目視されている。

「……あの組み紐の持ち主は女なんだろ」

「女だね」
「……砦の掃除婦なのかよ」
「かくにんするには、はいるんだね」

嫌な汗をかきながら一歩一歩近づく。軍だとか町を取り締まる存在にはどちらかといえばいつだって追いかけられる側だった。まさかこちらから近づくことになるとは。

ゼイが警護の人間の顔をはっきり分かる位置まで近づいた時、兵は厳しい声で停止の指示を出した。老婆はそこで背中から降ろせと言い付け、ゼイはどちらの命令も聞きながら両手を軽くあげ、無抵抗を示す。

降りた老婆は呑気ともいえる足取りで警護に近づき何かを告げ、向き直り、杖で早く来いと振った。

警護の一人が砦に入って行く姿を確認しながらゼイが老婆に近づくと他の警護に武器を身につけていないか確かめられ、その後台帳に署名させられた。提示した身分証明の札も持っていかれる。札がないと町から出ることはほぼ不可能だ。

「……掃除婦の休みの日に、会わせるって考えは無かったのか、ばあさん」

ゼイはやけくそで女を掃除婦扱いにし、またしゃがめと杖で言った老婆を勢いよく背負いながら呟く。

「そうじふに、休みがあればな」

休みのない掃除婦にも、ゼイは会いたくない気分に少しなった。

＊　＊　＊

通されたのは予想通り掃除婦の作業場所でも詰め所などでもなく、砦内の一室。入口からそう歩かず着いたそこは扉がなく、ただ机と椅子が幾つかあるだけの面会部屋のようだった。

二人の警備が部屋の入口を固める中、ゼイは座るでもなく壁際で腕を組んで待った。老婆はもちろん既に背中から降ろしていたが、緊張などは無いかのように中央に置かれた椅子に鎮座している。茶でも寄こせと言いだしはしないかと妙な心配が頭をよぎった自分がゼイは嫌だった。

部屋の外で少しの物音がした後、低いだみ声と赤茶色した髭面の巨漢が部屋の中の空気を押すように入ってきた。

「何だ婆さん、まだ生きてたか」

たった一人部屋に入ってきただけというのに急激に部屋の密度が上がった。赤茶に混じる白い髪は短く、硬質。口周りから顎へと髭を生やした男から放たれる威圧感。その髭面の口元は薄っすら笑いを浮かべていたが、身体の大きさ以上の何かを発している硬さにゼイは圧される気がした。

「としよりには茶ぐらいだすもんだよ」

「飲ませた後、腹をこわしたって金をせびられるからな」

「こわさんでも、せびればちょうどいいだろ」

前髪に隠れて表情の読めない老婆は気圧された風もなく杖に両手と顎をのせている。茶褐色の軍服を着た巨漢は再びにやりと笑い、身体に不似合いな小さな椅子にどかりと座り、ぎしりと音を鳴らす。

「それで、生まれがナークスだっていうガキを連れてきて何がした

い、婆さん」
「ここに孫をあずけようとおもってね」
「おい」

唐突に進められていく妙な話を止めるためゼイは眉をひそめ口を挟む。それでも男はゼイに視線を寄こすことなく、ふん、と鼻を鳴らして老婆を見つめた。

紛争が終わりに近づいた頃この辺りを治めていた領主の城を改造、砦とし、辺境警備治安部隊の男が五十になった頃任務に就き、もう五年以上が経つ。

それ以前から老婆はナークスにいた。紛争で親族全てを失った老婆はこの界隈を動く事は無く、木屑を集め生き残った男たちを叱咤し少しずつ町並みを整えていた。

部隊の指示に従わないこともしばしば。金に五月蠅く、軍からせしめようとする行為も幾度か。それでも、信頼という言葉を置いてもよい人間だと男は感じている。その老婆が連れてきた、青年期の入口に立つ年齢の――孫。

周辺の治安は改善されつつあり、紛争の爪後も徐々に薄らぎ始めた町に来たコドモを使って老婆が何をしようとしているのか詳しく聞く権利が男にはあったが、老婆がこの展開でそうそう口を割る事は無い。

これ以上兵を必要とする訳ではなかったが、まあ適当動かしてみるかと男は口髭を親指で撫で上げた。

「金づるになる孫でも見つけたか」

何も聞いて来ない男に、老婆は何とかなりそうだと踏む。それほど長い付き合いでは無いが、この流れで無闇に止める男ではない。

「そんなところさ」

かかと笑う老婆に男も肩を揺らして笑う。そうして「ちょうど人手が足りなかった所だ」と取ってつけたように言い、胸元から書類らしき紙と筆で何かを書き付け始めた。

目の前で繰り広げられていく展開にゼイは舌打ちをする。探し人に会えると考え簡単にのこのこついてきた自分を殴りたいと思った。

五　少年と山吹色

「ちょっと待て、ばばあ」
「ほんとうに口のききかたがなってないね。あんたんとこできたえておくれ」

老婆はゼイの言い分を聞く事もなく男が向けた書類に何かを書こうとしている。それを止めるべく壁から離れ老婆に手を伸ばした。
その時、誰かが部屋に入ってくる気配にゼイは振り返った。こんな見知らぬ所で無防備に背中を見せる気にはなれない。

「入ります」

殺風景な部屋に入ってきた女、聞こえてきた冷えた声。
軍という組織に通常いるとは思えない存在とその声音。

「――ばあさま、用もないのにここまで来ないように」

殺伐としかけた空気を気にすることなく唐突に入ってきた女は続ける。対して返した老婆の「茶でもだしとくれ」という不満げな声とは対照的なほど感情をのせない音。

「商い証を取り上げるよ。……隊長も、補佐を撒かれては困ります。茶を持ってこいという伝言をされるくらいなら隊長室でお話し下さい」
「たまには緊急感も必要だろ」
「外だけで十分かと」

おおこわ、と首を竦めた老婆を「ばあさま」と呼び、巨漢の人間

を「隊長」と呼ぶ、黒髪の女。肩より随分上で切り添えられたそれと茶褐色の隊服の間にある首の色は白くは無かったが、その色調の差と細さゆえに妙にゼイの目についた。

「ちょうどいい、ウーリ隊長補佐。新入りだ、婆さんの孫だとよ」

「――ばあさまに身内はいません」

ゼイが軍属だと思った女は隊長補佐。その立場にしては手際よく持ってきた茶器を並べ、温かなそれを入れ始めた。

ゼイの存在に気付いても確認のために視線すら送って来ない女と男の会話はゼイにとってはどうでもよかった。

それでも何故自分が軍に入隊する話になるのかと老婆を問いただしたくても、人目があるここでゼイは口を閉じる。一先ずここから出たかった。

会話に背を向け踵を返し部屋の戸口に向かったゼイの足は当然のごとく警備の兵に止められる。

「どけよ」

言って退くような兵たちではないと分かっていても、ゼイは苛立って口にする。半歩離れて身体を揺らめかせ兵の視線を振らせ、ゼイは片方の兵の足を払い部屋を飛び出した。その瞬間踏み出そうとした軸足を背後から払われ、つんのめる。

ぶつかりそうになった壁に両手を付いたと同時に他の兵がゼイを壁に押し付け、抑え込んだ。

「血気盛んなガキだな、新入り」

「俺は留まるつもりはない」

「母親捜しで来たんだろ。町をうろついて、見つかったのか？　分かりもしない墓参りまでして。見つかるまでいたらいいぞ」

町に入ってからの個人の動向はある程度軍に把握されているとゼイは考えていたが、軍相手にはより経験不足を痛感した。逃れられない可能性が高い。離せと口に出すだけ無駄と分かっていても口走りたくなる。抑えつけが緩まないまま、老婆のいる方角を睨む。

そんな刺すような視線を感じても動じることなく、老婆は殊更安気な声で返事をした。

「小僧があいたいというからつれてきてやったのに、わがままなやつだね」

「黙れ」

動けるのなら今すぐにでも老婆の口を塞ぎ、罵声を浴びせたかった。誰にでも聞かせたい内容じゃない。ゼイは腕を後ろ手で抑えつけられても抵抗し続けた。

「何だ、母親が砦内にいるって連れてきたのか？　ここに女はいねーぞ、婆さん。ついに耄碌したか」

「あんたについてるウーリはかろうじて女だったとおもうがね」

老婆が白髪の奥から視線をウーリに送る。言われた本人には失礼とも思える台詞だったがウーリは何の反応も示さない。男は椅子の背もたれに重心をかけ、少し後ろに立つ自分の補佐に視線を投げつつ呆れた顔をした。

「女と思って側におけるわけないだろ。第一まだこいつは二十六だ、小僧の母親にゃ計算が合わなさすぎだろ。おっと、男でも作っていればこれからは可能性があるか。そんな色気はいまだ見えねえが。――おい、隊内に俺以外のいい男でも見つけたか？」

「……人の個人的な話を公にする必要性はありません」

何気に流しかけたが、背後で繰り広げられる三人の会話をゼイは信じられない思いで聞く。
――まさか、と思う。
まさか唐突に現れたこの女が、俺の探し人だと言いたいのか。
抵抗の止まったゼイに何かを感じたのか老婆が出された茶を飲みながら、かかと笑って言った。
「ここでしばらくはたらくことで、ちょうけしにしてやるよ小僧」
教えてやった礼は身体で返せ。老婆の意図するところを汲んだゼイは呆然としながらも帳消しにする代価についてこの場で詳しく語らなかったことに僅かにほっと息を突いた。しかしその直後に聞こえてきた、「休みの日には掃除しにうちに来い」という老婆の言葉に、緩んだ奥歯をギリと噛んだ。
そうこうしているうちに部屋の中にワジも連れて来られ、へらへらと笑う顔を壁際に追い込まれているゼイに向ける。
「お前がいるから来いって言われて名前書けって言われたから書いたら、何か入隊なんだって？　お前が一緒ならまあそれもいいかあ」
のんびりとしたワジの声にゼイは苛立った。もう適性検査か？と言いつつ警備を真似してみせた形のおかしな敬礼の腕を、憂さ晴らしに殴り払いたくなる。拘束されているゼイの状態を見てもただの検査と考えるワジの脳内は、随分平和なようだった。
「じゃあまたな小僧」と言って去って行った老婆と、「このガキ鍛えとけよ」と言って去って行った巨漢。残された、ウーリと呼ばれた女と数人の兵。
「……イルは隊長が執務に戻るまで確認、報告。アッカはこの二人

をいつものように」

ウーリの指示にイルと呼ばれた兵は頷いて部屋を出ていき、ゼイを抑え続けているアッカと呼ばれた兵は、上司に声をかける。

「ウーリ部隊長補佐、そうは言ってもこいつまだ抵抗してますけど」

アッカは手首をぎちりと掴んだまま、抵抗するかのように腕に力を入れ続けているゼイを壁から引き離した。

振り向かされてゼイの視界にウーリの姿が入る。部隊長補佐とも呼ばれた黒髪の女は片肘を付きながら茶を飲み、先程巨漢が書きつけていた書類に目を通している。

「え、ゼイ、入隊したんじゃなかったのか？」

顎を掻きながら目を丸くしているワジの事はもうどうでもよかった。

六　少年と黒色

ゼイにとって今目まぐるしく脳内を侵食している事実。
老婆が言った事は本当なのか。この目の前にいる、目もあわさない女。本気で十年前のあの女だと言いたいのか。老婆の間違いではないのか。
ゼイは突然引き合わされたこの状況にも、そのことを今ここで話題にできない事にも、心を乱され続けた。
思う通りに物事を動かせなかった自分の経験不足が疎ましかった。
そんなゼイの苛立ちを気にすることなく、黒髪の女はアッカに冷たい声を放つ。

「手続きは既に済んでる。隊長命令で入隊とのことだ」
「こんな状態でどうやって鍛えろと？　入るつもりのない奴を相手にするったってボコボコにする以外、ないですよ。分かってるでしょうが」

軍は規律が求められる。反抗的な人間は端から適性外だと背後の人間は言う。鍛えるという名の元に一方的な行為になるのは目に見えている。
誰の指示も仰がず生きてきたゼイにとって、何かの枠に押し込められるのは常に苦手な分野だ。留まる町に慣れ周りから多くの規律に合わせるよう求められ、それに嫌気がさす頃町を出ていた。
そこへいきなり、軍。
この女が探していた人間なのかどうかもはっきり聞く間もなく留まれ、と。

「……くそばばあ」

ゼイはいなくなった老婆に対して呟きながら後ろ手に拘束されている腕に力を入れ、苛立ちを抵抗に変えた。考えずに動いたそれを更に押さえ込まれ、ふらついた足を背後から払われる。呆気なく手を取られたまま膝を地面に付かされ、味わう言いようのない屈辱感。焦ったような声で俺の名を呼んで近づこうとしたワジも他の兵に拘束された。

「ゼイ」

誰かが付けた名を、女が呼んだ。先程の書類で見て知ったのか、それとも。

思考が乱れたままのゼイには、冷たい声の女から何かを読み取る事は出来なかった。

何の感情も込められていない音。

懐かしむでもなく、何か言いたげに躊躇うこともない声の調子。

無機で無感情の声。

十年前の女の声音などゼイは覚えているわけはなかった。暗闇の中で懸命に手を伸ばし小さな身体を抱きしめ続けてきた、顔すら見ていない女。ただ、その雰囲気だけがゼイを取り囲み続けてきた。

「あの老婆に騙されたのかどうかはどうだっていい。生まれがここであろうとなかろうと、こちらには関係は無い」

淡々と言葉を紡いでいく女。どれだけ目の前の女を凝視しても、記憶の底を掠りもしない。それでもいま聞こえてくる女の声音はゼイにとってどこか聞き覚えがあるものだった。

――以前の、俺の声音に、似ていた。抑揚のない、それ。

「軍務に就く間は僅かばかりだが金も支払おう。期限は一年」

手に持っていた書類をばさりと机の上に投げ、女は座ったまま膝を付かされているゼイに初めて視線を送る。
その感情のない視線と目が合い、埋まらないゼイの内側が一瞬鋭く痛み、――消した。

俺は何を埋めようとしていたのか。
始まりも知らず、何も持たずに生きてきた自分が、何を得ようとしていたのだろう。
なぜ――得られると思ったのだろう。

女から向けられた視線をきっかけに、抱えてきたそれを投げ捨てるという強さもなく、ゼイは消した。
老婆に問いただしたかった言葉も思考から消し去り、呼び込む――無。
組み紐の意味。女の生存の有無。探し人の正否。
確かにゼイの中にあったそれらは空虚な暗闇の中を少し揺れ動き、暗闇に溶けて、消えた。
痛みを消した後に浮上する感覚。懐かしい、それ。
怒りも痛みも悲しみも喜びも楽しみもなく、ただ投げ遣りで、全てを嘲るような感覚。日々自分を生かしていくだけなら、これだけで事足りることをゼイは覚えていた。
いつの間にか身につけていた感情の起伏は、ゼイにとって一気に必要のないものとなる。
目の前の女があの日の女だとしても、もうどうでもよいものとして処理された。
ゼイがこの十年でいつの間にか多くの感覚を身につけてきたように、女のこの十年も多くの感覚を捨てる日々だったのだろう。
例えそうでないとしても何もかも曝け出して問う気は失せ、求めていた空いたそこを見る意志も失せた。ただ、どうしようもなく空虚なそこは疼く。それでもそこから発せられる痛みも、暗闇に溶か

し続けた。
そうしてゆっくりと深呼吸し、ゼイは抵抗していた肩の力を抜く。
懐かしいその感覚に身を委ねた時、屈辱感は消え、感覚も鈍くなる。せせら笑うように口元が歪んだのが分かった。

「……いいさ、やろうか。手、離せよ」
「そう言われて暴れられちゃかなわんね」

アッカの呆れたような声に、ゼイは無感情に返す。

「次に抵抗したら容赦なく斬ればいい。あんたらが言ったように期限は一年だ。それでいいだろ」

どこか笑っているような声音だけを残し、抑揚をなくした低い音で返事をしたゼイの視線は地面に向かっている。
ゼイにとって女を見る必要は無かった。
自分の身の内にある空虚さは、埋まらない。そもそも埋まるものではないのだろう、と溶けた暗闇の隙間が答えた気がした。
変化したゼイの声音と態度に、ワジがどこか悔しそうな声で幼馴染の名を呼んだ。

幕間　ワジと弟

オレには弟がいる。
誰かがはじめた紛争で、いつからか一緒にいた弟。
からだの大きさも背の高さもいつだってオレのほうがでかいから、オレが兄ちゃんであっているんだ。大きいやつが年上って聞いたから、兄ちゃんで絶対あってる。
弟は表情がいまいち暗くて、じっと周りの様子をみてはどう動こうか考えているようなヤツだ。
それに人を簡単に信用しない。でも真っ向から勝負していくまっすぐさがある。もちろん思わぬ方向からの攻撃だって得意だ。
笑って、目の前のことだけ見て、弟の言うことはなんでも信用して、でもすぐ勝負出ずにふらふらと動くオレとは正反対だな。

オレはいつだってだれかと一緒に寝るのが好きだ。一人は寒いし、なにかあってもそばにいたやつを盾にして逃げられるから。
本当は信用できる弟と一緒に寝たかったけど、あいつは一人で寝たいらしい。寝相が悪いんだろうと思ってる。
でもずっといたナークスから逃げだしてからは、ふらふらしているオレも兄としての立場を見せてやる必要があった。
あいつは昼だろうが夜だろうが勝手に次の町に移動することを決めるから、その視線を追うようにした。普段は薄く開いた目でどこを見ているのかわからないぼんやりとした顔をしているくせに、何かを決めると目つきがきつくなる。旅立ちの前日が一番わかりやすい。
どこにでも一緒に行くってわかってるはずなのに、夜中に出ていくあいつをおいかけるたび、驚いた顔をするのがおかしかった。静かなくらやみの中、いつも笑い声をこらえるのに必死だよ、兄ちゃんは。

ナークスから出て最初に逃げこんだ山奥に住んでいたじーちゃんたちにはいろいろ教えてもらった。弟がしばらくそこにいるようだったから、オレもほっとしてその言葉をよく聞いた。

たとえば、じーちゃんたちは『家族』ごとに暮らしていて、困った時『家族』は『家族』をだいじにするのが男の人生の見せ場だと教えられた。

ならいつも一緒にいる弟は『家族』だ。

だいじにしよう。あいつが大人になるまで、じーちゃんたちが言っていたようにそばにいよう。

『家族』ならオレの笑い顔をうつせって言われた。びょうきと違って話をしていても笑い顔はうつらなかった。なら、うつるまでそばにいよう。くすぐってみろって教わったから、じーちゃんと一緒にあいつのすきをついて脇をくすぐったけど、弟の口元が変にゆがんだだけだった。周りのことをよく見てるくせに覚えの悪い弟だと思った。

じーちゃんたちから教わったことは、そこを出てから役に立った。

そうして商人たちから仕事をもらって、それなりの言葉づかいも真似て、人から奪わなくても金をかせげるようになったころ、弟は突然ナークスに戻ると言った。なにかを決めた目だった。

その目を見た時、オレたち『家族』は次の『家族』を見つけてもいいかもしれないと思った。増やしても、いいかもしれない。でもその最後に、最初に弟と出会ったところに行ってみようと思った。

そう思った先で、少しだけ明るくなっていた表情やにらまなくなった目を、弟は昔に戻してしまった。

『家族』としてこれはよくない。

これがきっと、オレの人生の見せ場だ。

なにかをだいじにいつも肌身離さず守っている弟が、探し物をしている。
かたちのない、なにかを。
オレは兄ちゃんだから、それがなにかを知っていると思う。
見つけるのを手伝うのが、兄として最後の役目。
でも少しの手がかりだけであいつはまっすぐに見つけるはずだ。
いつだってオレの弟は、オレのそばにいて、オレの先を走っていたから。
オレが見えているものだって、きっと。

七　青年と第三

「お前が第三に来るとは思わなかったよ」

灰色の廊下を進む途中、シズキが尋ねるでもなく話し始める。

シズキの黄土色の髪は肩より少し上でバラバラに切られており、耳より上の髪は同じ高さで紐で結ばれている。その紐が砦内の風に少し煽られ揺れ続けていた。

「あれだけ最初に騒ぎを起こしてたからな、第一かと思ってたけど。あそこの小隊長はお前みたいな喧嘩早い人間を屈服させるの好きなんだよ」

だから情報収集部隊でのんびりできて案外良かったと思ったらいいよ、と言うシズキの声は安穏としている。

細い階段を上っていくシズキの足取りは、後ろをついて歩くゼイの常より遅い。

どうやら久々に入った新入隊員に先輩風を吹かしたい人間のようだった。ゼイはよくしゃべるシズキの後を無言でついて行くが、その人間に付き合う心中は面倒臭くも苛立ちもしていなかった。新しい部屋まで案内するというその言葉に、ただついて行く。

前から聞こえてくる、情報収集部隊――通称第三――で過ごす心構えと題されたシズキの話は風のようにゼイを通り過ぎて行き、その風は階段の遥か上部を見上げるようゼイを促した。ゆっくりと上っていくその速度のおかげで小さく切り取られている空気坑から空が少しだけ見え、その色は壁の薄暗さより少しだけ薄い青だった。

「お前の部屋はこの階の一番手前、この四人部屋な。でもこの部屋をあてがわれてるのはお前以外に一人だけ。そいつのとこ以外の好

きな寝台使っていいよ」

部屋まで誘導し、誰もいない部屋の窓を勢いよく開けて空気の入れ替えをし始めたシズキは、確かに第三小隊長補佐という立場に向いていた。その世話好きそうな動きをゼイは軽く見やり、小さな寝台の上に少ない荷物を投げ置く。

期間限定の入隊書類に署名してから、三ヶ月が経過しようとしていた。

アッカに抑えつけられていた両手を解放された後、ゼイは一通りの生活様式と予備兵としての初期訓練について説明があり、ワジや他の兵と共に相部屋に押し込まれ、翌日から始まった訓練をただこなす。

それほど訓練に人員と時間を割かれることはなく、早々に複数兵で組まされ雑務を指示されていった。

掃除、洗濯、伝令、見回り。重要でない書類の整理、武器庫の管理。日々数時間にわたる訓練。

その合間、先に任務に付いている人間たちから繰り出される不条理な言いがかり。どこにでもそういった輩(やから)はおり、ゼイにとって目新しい出来事ではなかった。

初めのうちそれに対処すること自体どうでもいいことだったが、そのうちいつもの如く面倒になり難癖を付けてくる人間を叩きのめし、それを繰り返すにつれ数人がかりで倍返しされるそれにも飽き、塵芥のような扱いをされるままにした。それに付き合うことも億劫になったゼイは、ワジを使ってシズキたち小隊長補佐の目につくよう騒ぎを起こし、表向き静めさせた。そしてそれまでに掴んだ情報を元に、陰でなお手を出そうとする人間の口も手も止めさせ、一先ずの静けさを得る。

そうして遠巻きに送られる視線や無関心な周囲を気にすることなく、ワジがいつものように笑いぐずぐずと愚痴を言う横で淡々と作

業を終わらせていく。時折向けられる心配そうなワジの視線がゼイにとって邪魔な最後の残骸。
それでも身体と思考を目の前にくる事柄にただ向け、与えられる仕事をこなし、疲れた身体を横たえては回復させる日々に変化が起きた三ヶ月目が、今だった。
ワジは警備兵としての適性ありとして警備を主とする第二小隊へ異動し、ゼイは第三小隊へ異動となった。
第三小隊は最初にゼイを拘束したアッカが小隊長として立つ、紛争後の保安が主。町から上がる秩序を乱す情報を収集し対策を練り第一や第二に情報を提供する、辺境警備治安部隊の中では後方支援とも言える小隊だ。
ゼイの行動や適性を考えると機動を主とする第一かと思われていたが、ここに居座るつもりがないゼイにとってはどこに配置されるとしてもそれを受け入れるだけのことで、内容のない雑用で終わる一年になったとしてもただそれをこなす。誰の下につくとしてもゼイの感情を動かすものにはならなかった。

――あの女が見えない所なら、どこだっていい。

早く期限が来い。
ゼイの望みはそれだけだった。

＊　＊　＊

目の前に一枚の書類が出され、ざっと目を通したゼイが流れるように署名する。
「ちゃんと読んだのか？　後で文句言うなよ、正式な誓約書だから

な」
「第三の心得ならシズキ補佐に先程お伺いしました」
「いやあ、そんな心得ってほどでもないんだけど」

照れたようにシズキは鼻先を親指で弾いた後ゼイの手元から書類を取り、座ったままのアッカに手渡し、そこへアッカは即座に署名してシズキに放り投げた。

「ま、部隊を出た後に秘匿するほどの情報は落ち着いてる現状でそれほど出て来ないだろうが」
「じゃあ町の巡回に午後から回していいですよね」
「シズキにまかせる。俺のこの後の予定って何だっけな」
「朝言ったじゃないですか。昼飯までに部隊長たちとの会合。あ、そうだ、部隊長補佐が先日集めた排水溝の現在地情報が会合までに欲しいそうです」
「はあ？　急ぎだって？　聞いてねーぞ」
「多分。先程すれ違った時に言われたんですが」

アッカの後ろの書棚からその書類を探しはじめたシズキにゼイが声をかける。

「シズキ補佐、俺は戻っていいですか」
「ああ、とりあえずさっきの作業に戻ってて。昼飯後に食堂で巡回の説明するから」
「了解しました」
「――ゼイ」

部屋から出ていこうとしたゼイにアッカがにやりと笑みを送る。面倒臭い話になりそうだとゼイは思ったが、表情に出すことなくアッカの言葉を待った。

「このところ随分静かになったが、何かいい情報入ったか」
「……イル小隊長が町で女を囲い始めたそうですよ」
「へえ、あの堅物がね。ってそりゃどうでもいい」
「本当！？　うー、痛いなあ。僕振られる方に賭けてたのに。エンドル隊長の一人勝ちに近いんじゃないですか？」

第二の小隊長が惚れた女の話は少し前から砦中の冷やかしのネタになっていたが、女の方がつれない態度だったために何事も勝敗をつけたがる人間たちの間で賭けの対象になっていた。それでも町に下り巡回している人間が噂として知り砦内に流布するよりも早く、砦内で作業をしているゼイがその情報を掴んでいるその事実にアッカは驚かない。シズキにとっては賭けに負けた事実の方がいまは重要だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3201t/

いつからか

2011年9月26日13時26分発行